

夜風に少女の鳴き声が響き渡る。町角で陰部を刺激される。まさに悪夢であった。「だ、だめッ！　だめよッ……そ、それは、それ、それは……ああおうッ！」
親指で肉頭巾を持ちあげ、中指の先端で陰核をごりごりとかきむしる。苦悩がカレンの粘膜を襲い、少女の胎内に眠っていた獣の血が陰核に集中する。

「ああおっ……おおッ……おおッ、おおう、おおううっ！」

大腿をひろげたまま、少女は鳴いた。青い火花がクリトリスでスパークしている。——これ以上クリを揉まれたら……。

少女の思考はまとまらなくなっている。快感がカレンの理性を鈍らせているのだ。くちよくちよくちよ……。

剥かれた襞。護るもののない急所を、少年の指先が削りつづける。爪で引っかき、転がし、指の腹で押しつぶす。

「ん、んおおっ、んおッ……おおうっ！　おおおおッ！」

気持ちよい調べに、カレンはまるで獣のように身体を激しく揺する。ぴったりと一つに固められた左右の乳房が、ぶるぶると波打つ。

刺激によって自らの中心が開いていくのをカレンも感じている。肉厚の陰部、襞の内側にのぞく綺麗な粘膜の奥からは、急速に蜜が溢れでてくる。

「ん、ん、んふ……」

なんとか刺激に抗しようと、カレンは鼻を鳴らした。最後の抵抗であった。負けたくない。こんなところで辱しめに屈したくない。だが。

カレンは言葉ではなく、悲しげな視線を土岐博隆に送り、その視線に対する返答が見舞われる。

ぐりぐりぐりッ！

陰核への痛撃。鮮烈な快感に少女の金髪が逆立った。抵抗は一瞬で粉碎されてしまったのだ。

「んおおッ……おおうッ……うッ、うッ、うおおおうッ！」

喉のどからあふれる低い牝鳴き。夜の町に、少女の悲痛な歓声が響く。そして。時が来た。

少年の指がカレンのクリトリスを解放する。少女の陰核は湯気が立ち昇るほど硬く勃起している。

「はあ、はあ、はあ……」

陰核マッサージに、カレンはふらふらになり、そこで、土岐博隆が残酷な芸術を完成させることとなった。右手に握っていた細い糸の輪を、カレンの陰核にくるりと巻

きつけ、そのまま固く締めあげたのだ。

「あおッ！」

弛緩のあとの緊張。不意打ちにカレンはのけぞった。

少年は、カレンの陰核を絡め取ったテグスの先端を少女の右の乳首に巻きつけた糸の端と寄り合わせて、こよりを作るように指でひねった。細い糸は軽く捻られることで一本につながる。まるで手品のようであった。右の乳首からはじまった電線のリレ―は、カレンの左の乳首、さらには陰核に食いこんで、再び右の乳首へと至る。

「あ、ああ……」

驚き、苦悩するように、カレンは自分の肉体に仕かけられた肉の芸術に熱い眼差しを送る。興奮した少女の唇からもれだすのは、意味不明な喘ぎ声だけ。糸による芸術はいよいよ完成を見ることになる。

小さな、小さな変化が起こった。奇跡であった。白い糸が、カレンの陰部から垂れ流れるエキスを吸いはじめたのだ。途端、急激な刺激がカレンを襲う。

「あ、ああ、い、糸が！ 糸が！ 糸が！ 糸があああッ！」

乳首と陰核をつなぐ糸が、ラブジュースを吸ったことで急速に収縮していく。痛みが変わってしまう直前の刺激に、カレンは卒倒しそうになる。



「あおおッ！ と、とめ……とめて！ とめてとめてえええっ！」
 クリトリスに、左右の乳首に、糸が激しく食いこむ。カレンは涎よだれを垂らし、額を汗で光らせて悶絶する。

「あ、あおおっ！ おおうッ……おおおおッ！」

蜘蛛の糸が固く固く張りつめていく。左右の乳首とクリトリス。女体の三点よがの尖りが描きだす綺麗な逆二等辺三角形がじりじりと縮んでいく。

「あ、ああ、あおッ……おおっ……おッ……おおうっ！」

少女は金髪を振り乱して苦悩する。まさしく女の姿をした豎琴なまこと。ぴんと張りきった蜘蛛の糸に引つ張られ、カレンの乳首は奇妙に歪み、逆にクリトリスは包皮を剥かれるように、無理やりに立ちあげられていく。

「おお、おおうっ、おおーっ！」

身体を中心に三点の突起が引きつけられていく苦悩。初めて味わう鋭い刺激に、カレンは身体を硬くする。もはやなにも考えられず、なにも語ることはできない。

「お、おッ……おおおッ！」

カレンは美貌を醜ゆがく歪める。縮む糸の動きに引かれて、少女も身体を前方に丸めていく。少しでも陰核と乳首への痛撃をやわらげたい。

だが、少女を後ろから押さえつける間浩一郎の腕が、少女の逃走を許さない。金髪の少女は万歳をするように両手をひろげ、脚を開脚したまま、糸に身体を蝕むしばまれていく。もはやなす術すくはない。

そして。

残酷な糸の収縮がぴたりととまった。

苦痛になりきらない、ぎりぎりのラインでの停止であった。大蜘蛛は少女の肉体ではなく、快感によって心に痛打を与えようとしているのだ。

「は、はうう、は、はうう、は、はうううう……」

カレンの唇が、奇妙な吐息といきをもらしはじめた。少しでも身体を動かせば、糸の締めあげが少女の肉体に刺激をもたらす。そのことがカレンにもわかっているのだ。これ以上、恥をさらさないためには、わずかな動きも許されない。

「は……はうう……は、はうううう……」

惨めな吐息をもらし、少女は必死に三点責めをこらえようと努力する。だが。カレンの必死の努力も結局は空しかった。

びん……。

邪悪な少年の指が堅琴の弦を弾き、カレンは鬼の形相ぎようそうとなって目を見開いた。